

放射性物質漏れ

東日本大震災

福島原発で炉心溶融



約12km離れた上空から撮影した福島県の東京電力福島第1原発1号機(奥左端)
=12日午前9時35分、共同通信社ヘリから



経済産業省原子力安全
・保安院は12日午後、冷却機能を喪失していた東京電力福島第1原発1号機(福島県大熊町)の周辺で、放射性物質のセシウムが検出されたと発表しました。

セシウムは炉心のウラン燃料が核分裂してできる物質。保安院幹部は記者会見で「炉心の燃料が溶けだしている」とみてよい」と炉心溶融(メルトダウン)が進んでいるとの見方を明らかにした。

東日本大震災の発生で自動停止してから約1日で、放射性物質の拡散を抑えることができない原発事故としては最悪の事態となった。

こうした事態でも電力が供給されていれば、緊急炉心冷却装置(ECCS)が働き、炉心が冷却されるが、1号機では外部電源の供給が止まった上に、津波の影響などで非常用ディーゼル発電機も動かなかった。炉心の水位は12日朝には燃料の上端から下に最大で約65センチとなっていたが、午後には最大同170センチと急速に低下。炉心が徐々に水面から露出して、冷却ができず、こもった熱で溶けだしたとみられる。

炉心溶融は、1979年の米スリーマイルアイランド原発事故でも発生した。